

字法なるものも附加されてゐる。

尙附録として各省區面積表、鐵路里程表がついてゐる。地圖の編纂は修史事業と一脈相類する處あり、一國文化の消長を知るべき一つの指標と考ふる事ができるが東洋の先進國を以て任する我國にこの新地圖に優る程の大地圖帳の完成せられん事を希望して止まない。(米倉)

●東洋文明史論叢

桑原 隲 藏著

この書は桑原博士遺作集の第二部に當り、博士の數ある論文
中支那文化及び東西兩文化の交渉に關するもの左の十三篇を
擇んで收載せられてゐる。

歷史上より見たる南北支那

紙の歴史

經子に見えたる宋人

支那人間に於ける食人肉の風習

唐宋時代の銅錢

長安の青龍寺の遺趾に就て

司馬遷の生年に關する一新説

隋唐時代に支那に來住した西域人に就て

明の龐天壽より羅馬法皇に送呈せし文書

創建清眞寺碑

支那人を指すタウカス又はタムガシといふ稱呼に就て

支那の記録に見えたるイスラム教徒の猪肉食用禁制

新發見のカトリック教の宗論關係の二史料

論文各篇は何れも博士生前數種の學術雜誌上に發表せられて、學界の舉つて重んずる處となり、現在に於ても東洋學研究者の必讀、常に參考とすべきものとされてゐるもののみであるから、今更茲にその個々の内容紹介を贅する必要があるまい。尙卷頭には博士壯年時代の寫眞及び羽田博士の序文があり、卷末に索引が附されてゐる。

(京都弘文堂、五一七頁・價三・八〇)(内田)

●渤海國志長編 二十卷

編者金毓紱氏は現今奉天公署參事官にして奉天の國立圖書館副館長を兼任、滿洲國屈指の學者として令名高き人。本編は氏が遍く日支鮮の史籍を涉獵し、北は吉林・黑龍江二省に走り、東は朝鮮半島を極め數年間腐心研鑽の末先頭上梓の運びとなりしものである。渤海國志長編なる書名は氏は満足はさせなかつたが最初に氏を刺戟誘掖する所ありし唐晏の渤海國志に負ひ、李燾の續資治通鑑長編に倣つて長編と附加せしものといふ。その體裁は

卷一總略上、卷二總略下、卷三世紀、卷四後紀、卷五年表、卷六世系、卷七大事表、卷八屬部表、卷九宗臣列傳、卷十諸臣列傳、卷十一士庶列傳、卷十二屬部列傳、卷十三遺裔列傳、卷十四地理、卷十五職官考、卷十六族俗考、卷十七食貨考、卷十八文徵、卷十九叢考、卷二十餘錄、より成り別に附圖二幅を添えてゐる。その引用書目は一百三十餘種を算へ、その列傳所收